

加賀・越中の国境の砺波山で平氏を破り、平岡野・小川・藤塚・今湊・安宅湊へと逆襲した木曾義仲の軍勢は、篠原村で平氏の軍勢を追い詰め、斎藤別当実盛らが討ち死にした。

現在でも源平の主要な舞台となった、南加賀にはそれにまつわる伝承や史跡が多く残されている。

小松の多太神社に残された、実盛の兜を見た、芭蕉が「あな無残兜の下のきりぎりす」と詠った、のはそれから、後世の事である。

源義経が、兄頼朝との対立の結果、奥州平泉の藤原秀衡を頼って、北陸道を落ち延びてゆく。

この物語を伝えるものとして軍記物「義経記」や、謡曲『安宅』などがある。

そしてこれらに取材して、歌舞伎「勸進帳」は弁慶と富樫左衛門の劇的な物語が編まれた背景として『根上の松』は無視できない歴史的な景勝地であつたのではなからうか。

## 皇国地誌より

石川県庁に明治初年に編纂された首題の地誌が残されている。その中に「根上松古戦場」と銘打つての報告書があるので、次に掲げる。

「本村の西南稻荷社後に元根上り松あり、蓋この辺なるべ

し、寿永二年五月、平 維盛一万余騎を引率し、源 義仲を北国に征討す。

源軍、これを篠原及び安宅に拒ぐと雖も、遂に敗走す。

時に加賀人井上範方十七騎を従え根上松邊にて防戦十余合遂に戦死す「源平盛衰記」。

根上松その根、磐竜状をなし地上に高く枝昂し、鉄鋼を掛けたる如く、奇形の松なれば自ら村名にもなりたるならん。

後の見る者をして、実に六百年前古戦場の景気感慨せしむ「三州記」。

土人言う、この松、今を隔たる二十余年前枯れたりと。遺憾と言えし。

と記されている。

## 旧浜小学校校歌

寄る波清き 北海の 浜の真砂に 生い出でし

根上松の名に負える 里の榮えは限りなし

越路の山の 長として 姿 気高き 白山の

千古の雪の光をば 学びの窓に仰ぐかな